

2015 年 4 月 23 日
第 59 回 CSW 及び第 3 回 WCDRR について聞く会

第 3 回国連防災世界会議における 女性主要グループの取り組みとその成果

男女共同参画と災害・復興ネットワーク（JWNDRR）
代表 堂本暁子

配布資料一覧

1. 第 3 回国連防災世界会議までの経緯
2. WMG の提言（原ひろ子さんスピーチ）
3. 仙台防災枠組（ジェンダー関連部分の抜粋）

第3回国連防災世界会議までの経緯

2005年1月 第2回国連防災世界会議（神戸市）

「兵庫行動枠組 2005-2015：災害に強い国・コミュニティの構築」（HFA）を採択。世界的な行動指針としては初めて、災害リスク削減（DRR）を主軸とし、リスク評価から教育・トレーニング等に至るまで、ジェンダーに基づいた考え方を取り入れる必要があるとされた。

2005年 国内における防災施策の改正

HFA の採択を受け、7月に改正された防災基本計画に「女性の参画を含めた多くの住民参加」「被災時の男女のニーズの違い等男女双方の視点に十分配慮する」などの文言が盛り込まれた。また、12月に公表された男女共同参画基本計画（第2次）に、新たな取組を必要とする分野として「防災（災害復興を含む）」という項目が追加された。さらに、2008年の防災基本計画改正では「防災に関する政策・方針決定過程及び防災の現場における女性の参画を拡大し、男女共同参画の視点を取り入れた防災体制を確立する必要がある」とされた。

2011年3月 東日本大震災

観測史上最大の地震と、その後発生した津波により 15000 人を超える死者を出した。避難所などが男性主導で運営され、女性などが困難に直面した。また、福島第一原発事故により、広域に渡る放射能汚染被害も発生した。

2011年4月 男女共同参画と災害・復興ネットワーク（JWNDRR）活動開始

全国 47 都道府県の女性団体や個人によるネットワークを結成し、日本政府に向けた要望活動を展開した。復興基本法や基本方針に男女共同参画の視点が盛り込まれたほか、防災基本計画や災害対策基本法が男女共同参画の視点から改正された。

2012年3月 第56回国連女性の地位委員会

日本政府の提案により、決議「自然災害におけるジェンダー平等と女性のエンパワーメント」がコンセンサスで採択された。女性の災害対応能力の強化や、防災に関する政策等にジェンダー視点を取り入れること、女性の平等な参画の機会を確保することなどを加盟国に要請した。

2014年6月 JWNDRR 主催の国際ラウンドテーブル（仙台市）

第3回国連防災世界会議の仙台市開催決定を受け、仙台提言を採択。防災関係の意思決定に、

女性を30%以上参画させることなどを求める。

2014年6月 第6回アジア防災閣僚会議（バンコク）

国連加盟国や NGO などに仙台提言を提起し賛同を得る。日本政府代表の菅沼大使が、演説で「女性の参画とリーダーシップの重要性」について主張。スリランカ、バングラデシュ、マレーシアなどから参加する南アジアの NGO Duryog Nivaran が WMG（女性主要グループ）として活発に活動していた。特に女性のエンパワーメントとトレーニングについて議論された。

2014年7月 第1回準備会合（ジュネーブ）

WMG として堂本がジェンダー主流化に関するスピーチ。この会議を受けて公表されたポスト HFA の pre-zero draft に、女性の参画やリーダーシップについて記述された。

2014年11月 第2回準備会合（ジュネーブ）

ポスト HFA の Zero Draft で削除された「女性のリーダーシップ」に関する文言の復活を、WMG として提言。日本政府もこれを支持。JWNDRR としては、女性のエンパワーメントと人材育成の重要性を主張し、実現を求めた。

2015年3月 第3回国連防災世界会議（仙台市）

WMG として、ジェンダー主流化を DRR の基本原則にすべきことなどを要望し、一部が仙台防災枠組に反映された。WMG として、JWNDRR 副代表の原ひろ子がスピーチ。

※ 主要グループとは、1992年地球サミットにおける「アジェンダ21」に書かれた9つのグループで、国連の会議で意見を提示する権利を持つ。今回、主に活動していたのは女性、子ども・若者、先住民、市民社会、民間企業のグループ。

WMG の提言（原ひろ子さんスピーチ）

議長、各国代表の方々、ご来場の皆様

男女共同参画と災害・復興ネットワーク副代表の原ひろ子でございます。

Women's Major Group は、女性と女兒の人権とジェンダー平等の推進に尽力するとともに、2015 年以降の DRR 対応が全ての多様な人々を中心とするものとなることを求めています。災害をめぐるあらゆる危険要因への対応として、人権尊重を基本とし、女性たちが災害リスク削減のあらゆる面において参画することが必要です。そのために、私たち Women's Major Group は、今回の会議で討議される優先されるべき領域に関連して、以下のように提案します。

1) 多様なリスクの存在を認識し、把握すること、つまりジェンダー、性、年齢、「人種」、民族、地理的状况、収入、各自の特性や能力、その他に関して多面的なデータを集め、分析可能にすること、加えてこれらの資料をもとに、災害リスク削減の多様な度合に関するアセスメントを行い、ジェンダーの多様性に準じた災害リスク削減の方策を確立し実行する。

2) ジェンダー平等と女性の人権の尊重は、災害リスク削減のための基本的原則であり、そのことは国連の CEDAW, SDGs, UNFCCC その各文書に反映されています。私たちは、各国政府と全ての民間団体に対して、DRR に関する決議、計画、実践活動、評価、経過のモデリング、財務の配分などに関しての女性の参画を求めます。

3) 私たちは、例えば地方自治体の行政機関と女性団体の間で、コミュニティとしての災害対応に関して協力関係が構築されていくことを求めます。

4) DRR に力を注ぐ上で、女性や女兒のもつニーズ、能力、知識が尊重されるべきであり、それらが災害対応の過程に具体的に組み込まれる必要があります。その実現のためには、国連加盟国政府と民間諸機関は、以下の 2 点を重視する必要があります。

- ① ジェンダーに関連する多様な段階にまたがる専門性、調査研究、教育、訓練などの全ての段階に対処する予算、人材その他の資源を確保すること、
- ② 災害が発生する以前に、社会経済的多様性に即した災害に対する脆弱性を研究、検討し、 施策を用意すること

5) 災害復興に際して国連加盟国政府と民間諸機関は、以下の 2 点を重視する必要があります。

す。

- ① 災害発生前、発生直後、発生後の一定期間に関して、住民の性と生殖に関する、健康に関するあらゆる情報とサービスの提供を保障すること
- ② 災害対応に関しての女性たちの貢献を、それが有償であるか無償であるかに関わらず尊重すること

これまでの10年間、NGO Working Group としての女性グループは DRR の実践と対応力の構築に関してジェンダーと多様性の包含についての主張を続けて来ました。そして災害リスクの分析の手法を改善するためにジェンダー関連のデータを用いる際に、あらゆるレベルのリーダーの研修・訓練や多様な人々の参画を推進し、DRR の内容の構築と計画策定を改善するために努力してまいりました。

過去4年間、男女共同参画と災害・復興ネットワークは、日本全国の女性と男性、特に東北の被災地の女性たちと連携してまいりました。今後、多くの世代が、人類の幸福と貴重な地球の存続のために、国連加盟諸国の皆様が、人類史のこの大事な時期に、共通の結論に到達されることを期待しております。

以上、ご静聴ありがとうございました。

仙台防災枠組（ジェンダー関連部分の抜粋）

I. 前文

7. While recognizing their leading, regulatory and coordination role, Governments should engage with relevant stakeholders, including women, children and youth, persons with disabilities, poor people, migrants, indigenous peoples, volunteers, the community of practitioners and older persons in the design and implementation of policies, plans and standards.

III. 指導原則

19. Drawing from the principles contained in the Yokohama Strategy for a Safer World: Guidelines for Natural Disaster Prevention, Preparedness and Mitigation and its Plan of Action⁸ and the Hyogo Framework for Action, the implementation of the present framework will be guided by the following principles, while taking into account national circumstances, and consistent with domestic laws as well as international obligations and commitments:

(d) A gender, age, disability and cultural perspective in all policies and practices; and the promotion of women and youth leadership; in this context, special attention should be paid to the improvement of organized voluntary work of citizens;

(g) Disaster risk reduction requires a multi-hazard approach and inclusive risk-informed decision-making based on the open exchange and dissemination of disaggregated data, including by sex, age and disability, as well as on the easily accessible, up-to-date, comprehensible, science-based, non-sensitive risk information, complemented by traditional knowledge;

IV. 優先行動

優先事項3. レジリエンス（回復する力）に向けたDRRへの投資

30. To achieve this, it is important to:

(j) Strengthen the design and implementation of inclusive policies and social safety-net mechanisms, including through community involvement, integrated with livelihood

enhancement programmes, and access to basic health care services, including maternal, newborn and child health, sexual and reproductive health, food security and nutrition, housing and education, towards the eradication of poverty, to find durable solutions in the post-disaster phase and to empower and assist people disproportionately affected by disasters;

優先事項 4 効果的な応急対応に向けた準備の強化とよりよい復興

32. The steady growth of disaster risk, including the increase of people and assets exposure, combined with the lessons learned from past disasters, indicates the need to further strengthen disaster preparedness for response, take action in anticipation of events, integrate disaster risk reduction in response preparedness and that ensure capacities are in place for effective response and recovery at all levels. Empowering women and persons with disabilities to publicly lead and promote gender equitable and universally accessible response, recovery rehabilitation and reconstruction approaches are key.

33. To achieve this, it is important to:

(b) Invest in, develop, maintain and strengthen people-centred multi-hazard, multisectoral forecasting and early warning systems, disaster risk and emergency communications mechanisms, social technologies and hazard-monitoring telecommunications systems. Develop such systems through a participatory process. Tailor them to the needs of users, including social and cultural requirements, in particular gender. Promote the application of simple and low-cost early warning equipment and facilities and broaden release channels for natural disaster early warning information;

V. ステークホルダー（防災関係者）の役割

36. When determining specific roles and responsibilities for stakeholders, and at the same time building on existing relevant international instruments, States should encourage the following actions on the part of all public and private stakeholders:

(a) Civil society, volunteers, organized voluntary work organizations and community-based organizations to: participate, in collaboration with public institutions, to, inter alia, provide specific knowledge and pragmatic guidance in the context of the development and implementation of normative frameworks, standards and plans for disaster risk reduction; engage in the implementation of local, national, regional and global plans and strategies; contribute to and support public awareness, a culture of prevention and education on disaster

risk; and advocate for resilient communities and an inclusive and all-of-society disaster risk management which strengthen the synergies across groups, as appropriate. On this point, it should be noted that:

(i) Women and their participation are critical to effectively managing disaster risk and designing, resourcing and implementing gender-sensitive disaster risk reduction policies, plans and programmes; and adequate capacity building measures need to be taken to empower women for preparedness as well as build their capacity for alternate livelihood means in post-disaster situations;